

第2回 鶴岡市内の県立高校再編整備に係る関係者懇談会 記録（概要）

- 1 日時 平成30年8月30日（木）14:00～16:00
- 2 会場 鶴岡市第三学区コミュニティセンター 大ホール
- 3 参加者 委員 阿部敬子、岩田瑛子、尾形圭一郎、小川雅子、菅原弘昭
高橋たず子、藤野淳（五十音順、敬称略）
意見聴取対象者
齋藤哲、鈴木孝純、田澤妙子、村山秀樹（五十音順、敬称略）
事務局 柿崎教育次長
須貝高校改革推進室長、伊藤高校改革推進室室長補佐
奥山高校改革主査、丹野高校改革主査、安達高校改革主査

4 内容

- (1) 県教育委員会あいさつ
- (2) 意見聴取対象者の紹介
- (3) 説明・報告
 - ① 第1回懇談会における質疑応答及び協議の概要
 - ② 鶴岡市内の県立高校再編整備に係る意見聴取（事前聴取）の概要
 - ③ 田川地区の未就学児保護者対象説明会の概要
- (4) 意見聴取
《意見聴取事項》
 - ① 鶴岡市内の県立高校再編整備案について
 - ア 鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合
 - イ 加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合（校舎制導入）
 - ② 庄内地区への併設型中高一貫校の設置案について
 - ③ その他
- (5) 意見交換
- (6) 連絡

5 発言要旨

- (3) 説明・報告
質問等なし。

(4) 意見聴取

（鶴岡東高等学校長 齋藤 哲 様）

私立学校は、建学の精神により学校経営をしており、各私立学校とも考え方が違うところもある。少子化に向けて、子ども達の将来のために、学校がどうしていかなければならないか、各学校が特色を出して、子どもの育成にあたっている。

「鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合」については、私の意見としては、賛成ではないが、強く反対とも言えない。庄内地区への中高一貫校の設置については、以前は設置要望がなかったが、鶴岡市の要望があり、急速に進展していったと聞いている。急激な生徒減少が進む中、今までにない問題が生じている。県立高校も学級減を行っている厳しい現状であるが、鶴岡南高校と鶴岡北高校という伝統校が、統合して一つになり、さらに中高一貫校になることは疑問がある。また、定員の精選が大切な議論となるだろう。中高一貫校の設置にあたって、全体のバランスを考えていかなければならない。田川地区には、私立高校、県立高校、国立の鶴岡工業高等専門学校がある。鶴岡工業高等専門学校の定員は160人であり、公立高校、私立高校に影響が出てくる。このことも考慮して再編していかなければならないと考える。また、中高一貫校に関

しては、東桜学館高校は 200 名の定員に対し、183 名と定員割れとなっている。生徒が減少する中、中高一貫校の設置については不安である。

「加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合（校舎制導入）」については、加茂水産高校と庄内農業高校は、特色ある高校であり、田川地区にはなくてはならない学校だが、生徒減少により窮地に陥っている。これからも農業・水産は大事なところなので、鶴岡中央高校に含めていくことに反対しない。

「庄内地区への併設型中高一貫校の設置案」については、様々な疑問を持ちながらも、選択肢が増えるという考えもある。どうせなら、魅力的な学校にしてもらいたい。その中で、私立高校も切磋琢磨して頑張っていきたいと考えている。

(三川町教育委員会教育長 鈴木 孝純 様)

「鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合」については、計画案を読むと、高校再編整備の在り方や問題について、どんな解決策があるかなど、よく調査され、研究されている。これらを踏まえて、県の方針に賛成である。首都圏の進学校で教職に就いていた経験から、賛成とした背景について述べたい。

これからの子ども達は、将来を予測することが困難な時代を生きなければならないと言われている。子ども達に大人はどう関わっていくのか、大人のエゴを押し通すのではなく、子どもの視点で、子どもの将来を見据えた教育を考えなくてはならない。将来を予測することが困難な時代とは、1つ目は、2011年に小学校に入学した児童の65%は、大学卒業時に今はない仕事に就職するとの研究がある。また、今後10～20年後に47%の仕事が自動化されると言われている。2つ目は、人生100年時代を迎え2007年に生まれた子どもは、欧米では50%の人が104才まで、日本では107才まで生きると予測されている。大学卒業まで20年、定年まで働いて40年、老後20年といった人生80年時代の前提が崩れていくことになる。そうなると、仕事を長期中断したり、転職を繰り返したりと、様々なキャリアを経験する時代となる。結果的に様々な技能を習得したり、複数の仕事をするマルチステージを送ることになるだろう。日本政府も人生100年時代の構想会議を設置して、労働機会の拡大、選択肢を設けるなどして、いくつになっても学び直し、新しいことにチャレンジする社会を目指していくとしている。

では、今の子ども達にどんな教育を施せばいいのか。1つ目は、「引き出しの多さ」が大切だと考えている。その引き出しの中から、興味関心のあるもの、得意となるものを見出し、やり遂げることによって、生きる自信になる。子ども達の望む多岐にわたる教育を実践しているのは、おそらく今の私立学校ではないか。私立学校での面倒見の良さ、引き出しの多さが生徒の関心を呼んでいることも確かである。2つ目は、その引き出しを用意するためにも、学校規模が必要である。ライバルとの競争、切磋琢磨により、学校が活性化し、学力・運動能力が向上することにつながる。部活動、様々な教育活動をより効果的に行うには、1学年6～8クラスが必要で、履修科目の選択にも対応できる。大学入試では、自分の得意な科目で、志望大学の合格を勝ち取ることができるシステムになる。よって、鶴岡南高校と鶴岡北高校が統合する案に賛成である。また、県教育委員会の資料によると、平成26年から36年までに624名が減少する。庄内地区は減少率において22.4%と県内で1番高い。平成31年から36年で248名が減少し、あと5クラス減が予定されているようだ。

「加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合（校舎制導入）」については、教育、仕事、引退という一斉更新型の人生80年時代の前提が崩れ、複数の仕事に就かなくてはならないとすると、総合型の高校は、多様な技術、資格が習得・取得できる環境を提供することができる。職業に特化した履修科目も用意でき、また、科・コースを超えた横断的な単位の取得も可能であり、新しい学校のモデルとなる。2つの高校の統合は、時代の要請と受け取るべき。設備面や校舎が離れているなどの

問題は、教育の本質とは別のハード面でのことであり、クリアできると思う。

「庄内地区への併設型中高一貫校の設置案」について、中高一貫校は、特色ある多様な学校選択の1つである。6年間の一貫教育で、学力、運動などの様々な能力を伸ばすことが可能である。今春の探究科・普通科探究コースに受検者が多いということは、より高い学力を身に付けたいと考え、そういった教育を求めていると言える。また、6年間を通して志をもったリーダーの育成が可能である。メリット・デメリットも当然ながらあるが、中だるみというデメリットは、様々な形で子ども達を叱咤激励する方策をとることで解決が可能である。その子に合った教育を施すことこそが平等な教育である。それぞれの分野において、子ども達の潜在能力をいかに伸ばしてやるかが教育の本質だと思う。同様に学力差があることも確かである。学力差は努力差であり、いかに努力させるかが大切である。得意なものを見出し、良いところを認めてあげると、本人の自信となる。それを伸ばしてやり、得意なもので勝負させる。この再編整備計画案を進めることで、生徒は自己肯定感を持ちながら、将来を予測することが困難な時代を志・気概を持って、乗り越えることができると思われる。

(県立鶴岡北高等学校同窓会常任理事 田澤 妙子 様)

昨年9月に計画案が出されたときは、創立120周年の準備中であり、改めて伝統の重みを感じ、引き継いでいこうとする機運が高まっている最中であった。そこで、様々な意見が新聞の投書に載せられたり、同窓生から様々な意見が寄せられたりした。

「120年の伝統を誇る母校がなくなってしまうことに納得がいかない」「同窓会として鶴岡北高校存続の運動を進めるべきではないか」「男女共学校となり、定員割れもなく落ち着いた環境の中で、成果を上げている母校が統合の対象となるのは納得がいかない」「3クラスを維持し、単独校として残してもらえないか」「鶴岡北高校は新中学に校舎を明け渡して、鶴岡南高校に吸収されるという構図になり、鶴岡北高校の特色が生かされないまま、消滅してしまう」などの意見が寄せられた。こういった状況を受けて、臨時の理事会において、今後どのように取り組んでいくかを話し合い、計画案の再考を求める署名を集め、約2,000名分を県教育委員会に提出したところである。

昨年度の鶴岡北高校の進路状況は、4年制大学・短大66%、医療看護系専門学校27%、就職6%であり、就職の中心は公務員であった。多様な進路選択ができること、医療看護系の進学が多いことが、母校の特色である。2003年より進学重視型単位制が導入され、生徒の多様な進学希望の達成を支援しており、4年制大学への進学が最大で1.8倍に伸びている。昨年度、学習面、特別活動面でかなりの成果をあげている要因として、先生方が一人ひとりに寄り添い、生徒の持てる力をうまく引き出して、成長を促してくれたことがある。特別活動も活発で、部活動加入率は9割を超え、運動部では個人でインターハイ出場、文化部においても全国大会で金賞に輝いた音楽部をはじめ、新聞部、美術部、書道部等、地域の文化的な行事に欠かせない存在となっている。このような活躍は、1学年4クラス規模の学校では驚くべきことであり、文武両面に力を注いでいることも母校の特色である。

同窓会では、育英会制度や部活動への助成を通して、母校の活躍を応援している。育英会制度では、現役高校生には奨学金の給付、就学困難な卒業生には無利子で奨学金を貸与している。また、医療看護系の進学者が多く、就職率も高いとの実態を受けて、2009年より「笹原基金育英制度」を設立し、医療看護系の進学者を対象に貸与を行っている。これまで、約300名に給付・貸与を行ってきた。今後も生徒の夢を後押ししていきたいと思っている。これまで鶴岡北高校は120年の伝統のもと、多くの人材を輩出し、地域から愛されてきた。鶴岡北高校の気風は、時代は変わっても失われることなく、今の生徒に確実に受け継がれている。計画案により、特色ある母校がなくなってしまうと、中学生にとって魅力ある高校の選択肢が1つなくなってしまうこ

とは受け入れられない。3～4クラスで単独校として存続できるよう計画案の再考を願う。一方で、今年度より定員が3クラスとなり、県の想定によれば、今後もその規模は縮小されるとのことで、母校が先細りすることに不安がある。例えば、2クラスになると生徒の進路や特別活動が同様の教育環境が整備され、成果が期待できるのか楽観できない。生徒と教員の数が減少すれば、「生徒が興味関心のある科目や進路に必要な科目が学習できなくなる」「活動が成り立たなくなる部活動が出てくる」などが予想される。母校がこれまで培ってきた教育環境や活動の成果を引き継ぎ、さらに発展させるためには小規模の高校になることは望ましくない。小規模のまましばらく置くとの考え方も、生徒にとって何らメリットがない。母校の生徒が活躍している現状と将来の規模縮小によって起こる課題がある中、母校の在り方を含め、田川地区の子どもの将来に目を向け、この地域にどのような教育環境を整備し、子ども達に何を準備してやらなければならないかを話し合った。そして、母校が将来的に単独校として、存続することにどうしても検討の余地がないとするならば、ともに学級減が見込まれる鶴岡南高校と統合して、大学進学を目指せる、適正規模の公立高校をつくるという計画案についても考えていかなければならないのかもしれない。そこで、両校の統合が進められるようになった場合の懸念の1つとして、これまで培われてきた母校の特色が、何ら生かされることなく、鶴岡南高校の現在の教育環境にそのまま吸収合併されてしまうのではないかとということが挙げられる。このことについて、県教育委員会は、「統合により学校の選択肢は減ることになるが、入学後に提供できる教育活動の幅と将来の進路の選択肢が増えることになり、生徒の立場に立った計画である」と言っているので、この考え方が、これからの教育計画案に反映されるように慎重な検討を重ねていただけるものと大いに期待し、注目していきたいと思う。

「加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合（校舎制導入）」については、普通教科の教員の確保や部活動の機会が増える点では評価できる。一方で、資格取得や第1次産業の担い手の育成、そして当該生徒の負担などの点で問題がないのかと思う。また、感想として、農業と漁業の関係者に温度差があると感じる。

「庄内地区への併設型中高一貫校の設置案」については、併設型にも関わらず、校舎が分離している案には、併設型中高一貫校のメリットが十分に生かせないので、賛成できない。また、鶴岡市の中学生の人数が多く見込まれるとの県教育委員会の見解について、それはトータルの見方であり、市内と郊外の中学校の違いを見ていく必要がある。中高一貫の中学校が設置されることで、郊外や小規模の中学校の生徒や地域にどのような課題が生じるのかについては、慎重に検討が必要である。中高一貫校をはじめ各学校で育った地域を担う人材が将来的に地元に着定して、活躍できる方策も並行して検討すべきではないか。これは教育の側面だけではなく、地方創生の観点からも、行政や産業界レベルでの体制の整備といったことが求められるのではないか。

(山形大学農学部教授 村山 秀樹 様)

山形大学農学部の現状としては、18才人口が減る中で、近隣の大学では、農学部の設置が増えている状況にあり、対応に苦慮している。

「鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合」については、常識的に統合は避けられないと考える。田川地区の規模では、進学校を2つ置くのは難しい。互いに伝統校である高校であるが、少子化の現状では、統合は仕方がない。

「加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合（校舎制導入）」について、3校の高校入学者選抜の倍率を見ると、このまま維持することは難しいだろう。校舎制に関して、水産については、現在の加茂水産高校の場所で、歴史もあり、良いのではないかと。農業については、山形大学農学部としては、現在の庄内農業高校の場所よりも、大学に近い場所があれば、高大連携も活発にできると思われる。

「庄内地区への併設型中高一貫校の設置案」については、メリット・デメリットが

あるだろう。メリットとしては、教育が分断されない点であり、受験によりリセットされることがなくなる。大学でも、学部の4年と院の2年で6年一貫とする大学もある。受験対策の時間を別の時間に使うと、理科に関しては、座学を実験や実習にすることで、サイエンスに対する興味もわいてくる。中学でも探究型の学習を入れやすくなるのではないかと。英語に関しても、グローバル化・国際化への対応を大学でも盛んに行っている。受験勉強としての英語ではなく、英会話やコミュニケーションに重点を置くことも可能となる。デメリットの1つ目としては、受験勉強により学力が向上することもあるので、それが無いことである。中だるみも課題としてある。都会とバックグラウンドが違うので、都会と同じ中高一貫校のやり方だとうまくいかないかもしれない。山形らしい6年間の一貫教育を形作っていくといいだろう。2点目は、受験勉強で5教科バランスよく学習することが大事であるが、中高一貫校の生徒で、最初から文系と決めてしまい、理科をあまりやらない恐れがあることである。また、中学と高校の定員のバランスであるが、半分が高校から入ってくるようだと、教育が分断されないメリットが生かしきれない。十分にシステムを考えるべきだろう。

最後に、庄内地区全体を見て県立高校の再編整備を考えてみてはどうか。また、中高一貫校も庄内全体を見て考えてもよいのではないかと。

(5) 意見交換

【鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合について】

(委員)

鶴岡工業高等専門学校への対応に関する情報はないか。

(事務局)

鶴岡工業高等専門学校には、田川地区をはじめ県内全域から進学者が多くいる。県立高校と私立高校は連絡を密にする機会があるが、国立である鶴岡工業高等専門学校については、意見交換の場を持っていないのが現状である。

(委員)

鶴岡市の行政の立場として参加しているが、市として要望してきた内容について、現時点において広く意見を聞いて進めていただきたいと県教育委員会に申し上げており、今回4名の方のご意見、先ほどの資料の中にあつた様々なご意見を知ることができて、大変ありがたく思っている。今後どのような学校にしていかなければならないのか、この地域の中で学校はどうあるべきなのかを考えていかなければならない時代に来ていると思う。義務教育の小中学校においても、更に地域との連携、協働が求められており、高校教育においても、高校再編によって、この地域の中でどうあるべきなのかを考え、よりよいものにしていかなければならないと考えている。

(委員)

少子化は大きな問題で、この地域の未来を担う子どもをどのような学校で育てていくのかという視点が大切だという皆さんの意見と同じである。子ども達にどのような力をつけて、未来においてこの地域を支えてくれる人材を育てていくことが学校教育であると思う。適正な規模で、多様な教育ができる環境を整えてあげたいと思う。

(委員)

鶴岡市内の中学校校長会で話を聞かせてもらったところ、少子化に伴い、統合は避けられないというのが共通の認識であった。ただし、高校の組み合わせについての考えは様々あり、1つにまとめるのは難しいところであった。難しくなっている背景は、中高一貫校の設置と県立高校の再編を両方加味し、対応していかなければならないという複雑な内容だからであろう。もし、再編だけであれば前回対案が示されたように、様々な対案が出されるのではないかと。普通科の在り方がポイントとなるのだろう。また、既存の施設を使うことが前提であることも複雑にしていると感じる。中高一貫校の設置と県立高校の再編の両方を加味すると、多くのメリット・デメリットが

出されているわけだが、中高一貫校の設置については、校長会として大きな反対はないところである。そういったことから、中高一貫のねらいをより鮮明にすることによって、高校再編の在り方も見えてくるのではないかと思う。

(委員)

少子化だからこういう話が出てくるのだろうが、高校再編や中高一貫校の設置が、単に学力アップにつながるということではなくて、地域で育てた子どもが地元に戻ってくるよう、その先のことまで考えることができればいいと思う。鶴岡南高校と鶴岡北高校が統合することは良いことではないか。

【加茂水産高校及び庄内農業高校の鶴岡中央高校への統合（校舎制導入）について】

(委員)

小学校の校長として参加しているが、小学校の子ども達もいずれ自分の特性に合った高校を選んでいくことになるので、それぞれの特性、やりたいことを学ぶことができるという再編にしていくことが重要である。また、それぞれの同窓会も、それぞれの強い思いを持っているので、再編にあたっては、統合前の同窓会も、子ども達を応援していけるよう、よりよい話し合いが大切である。

(委員)

人数が減るのだから、統合はやむを得ないと思っていたが、農業関係者が賛成である一方、水産の関係者の中で、校舎制について、生徒ではなく教師が移動する方式ではどうかとあるので、検討する部分もあると感じた。

(委員)

鶴岡中央高校は、統合により普通科、総合学科、農業科、水産科4つの学校があるイメージとなる。現在の鶴岡中央高校の普通科と総合学科はどのような連携がなされているのか、それを踏まえて、農業科、水産科が加わったときの想定される課題についても、今後議論していくと良いのではないか。学校の規模や6次産業化等のメリットについては、生徒の数が多くなれば、多様な学習が展開でき、志高い生徒も入ってくるだろう。一方、現在の庄内農業高校と加茂水産高校に入っている特別な支援を必要とする生徒の対応について、学校運営が十分できるような手だてが必要だろう。

(委員)

農業と水産の違いがどこからくるのか、事務局ではどのように考えているか。

(事務局)

農業にも専門性はあるが、水産科で学んでいる学習や資格の取得は、それ以上に専門性が高く、特殊性があると思われる。県教育委員会としてはその重要性について十分理解しているので、入学者が40人を下回っているが、80人の定員を維持している。ただし、今後更に生徒が減少し、1学級の単独校となった場合、その専門性の維持が困難となると思われることから、統合と校舎制の導入を提案している。

【庄内地区への併設型中高一貫校の設置案について】

(委員)

未就学児保護者対象説明会では、鶴岡市で開催したシンポジウムであまり聞くことができなかった若い人の意見をいただくことができたことについて大変ありがたく思っている。既存の校舎等の活用について、この状況だから、これしかできないということではなく、この状況で最大限どんなことができるのかという議論をすべきだろう。

(委員)

メリットや課題が挙げられているが、子どもの選択肢が増えるという点で、大きな反対はなかった。一方で、少子化の中で1校増えることになり、鶴岡市の対応として、市立中学校の在り方を検討していく時期に来ていると考えている。

(委員)

選択肢が増え、魅力ある学校づくりをしていくという点で、皆さんと同じ意見であ

る。また、多様な子どもに対して一人ひとりに寄り添った特別支援教育を継続し、社会に送り出していく仕組み作りをしていかなければと考えている。

(委員)

デメリットとして、6年間で学力差が出てしまうことや高校から入学する生徒と中学から入学する生徒との学習面での進捗差や学力差について、どのように考えるか。

(意見聴取対象者)

私の経験では内進生の2割は、高校から入る生徒のレベルに届かない。ただし、入学させた以上は責任がある。中学の担当者の努力が必要であり、習熟度別授業などのシステムを取り入れるなど、個に応じて頑張らせることで学力差を埋められると思われる。また、中高の定員の比率は、半々が良いと思う。私立高校で、1クラスだけ高校で取る場合、その子たちは、内進生と同じレベルまで勉強してくるので問題ない。外進生が多いと外進生中心の学校となってしまうが、一方で、中学で取りすぎると周辺中学校への影響といった弊害もある。中高の定員の比率については、なんとも言いえないところであるが、内進生、外進生をそれぞれいかに育てあげることが大切である。入ってきた生徒の学力に応じて、いかにカリキュラムを作っていくか、先生方の腕の見せ所だろう。中高一貫教育とは、カリキュラムが一貫しているということでもある。ソフト面で一貫させることが大切である。分離型の校舎について、同じところに6年間いるのは、かえって生徒は疲れてしまうという面もある。環境を変えることでメリハリにつながる。

【その他について】

(意見聴取対象者)

鶴岡工業高等専門学校は、特色ある学校で素晴らしい学校であり、また、県立高校も私立高校も頑張っている。再編整備にあたっては鶴岡工業高等専門学校の定員も含めて検討してほしい。

(委員)

郡部在住の子どもが県立中学校に通いにくいことを考えると、あまり県立中学校の規模を大きくできないだろうが、理想は半々といった意見があった。県教育委員会の案では、中学2～3クラスで高校7クラス規模の学校とすると、中高一貫のメリットが薄れてしまうのか。

(意見聴取対象者)

私立の中高一貫校であれば、中学からの入学者を多くし、高校からの入学者を少なくするのは効果的だろうが、公立では無理だろう。理想は半々と言ったが、重要なのは、カリキュラムをもとに、その中学生をどのように育て、どういう目標を持たせながら、大学進学だけでなく、夢のある育て方をするかである。また、外進生に対し、中高一貫校としていかに一貫性を持たせるようにするかも重要である。